

---

# 英雄伝説 悪魔の軌跡

シャチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄伝説 悪魔の軌跡

### 【Nコード】

N9025Y

### 【作者名】

シャチ

### 【あらすじ】

気づいたら死んでいた！？転生！？じゃあブロリーで！！普通の大学生がブロリーとなって空の軌跡を破壊しつくすお話です。

## プロローグ（前書き）

はじめまして。シャチです。

この作品は処女作品なので

見苦しいところがあると思いますが  
どうか温かい目でお読み下さい。

## プロローグ

「……………飲酒運転による事故発生率が過去最悪であり……………」  
「物騒だねえ……………」

彼は普通の大学生。普通の小学校、中学校、高校と進級していき、今年の春ついに大学生となった。ただやはり難関大学と呼ばれるところには進学できるわけもなく、地元の中レベルの私立大学へ進学することとなった。平々凡々、その言葉が彼にはよく似合う。

「大学に入ったところで変わったこともないなあ……………」

彼はただ漠然に大学に進学することだけを目標に努力してきたのでいざ進学してしまった今、目標は失われていたのである。

「……………そろそろ時間か……………はあ……………」

ため息をつき彼は立ち上がり、玄関へと向かった。

そして扉を開け外に出た瞬間目の前にトラックが現れ、彼の意識は無くなった。

「……………何処だこころ……………」

気がついたら彼は真つ白な空間で横になっていた。俺は玄関の扉を開けたただけだぞ、と彼は不思議に思い、立ち上がって辺りを見回してみる。

「気がついたようだな。」

その声には彼は驚き後ろを振り返ってみる。そこには白いロープをまとった、地にまで届く白いひげを蓄えたいかにも威厳のありそうな老人が佇んでいた。

「誰だオッサン。」

「オッサ・・・、コホン、単刀直入に言おう。ワシは神じゃ。」

神？気でも狂ってるのか？と思うが辺りは白い空間、そして直前のトラックの記憶。まさか、と彼は思う。

「もしかして・・・、俺って死んだ？」

「その通り、よく分かったな。お前は死んでしまったのじゃ。」

即答。その言葉を聞いた瞬間彼はまた倒れそうになった。だが彼は何とか持ち直し神と名乗る老人に一つの質問を試してみる。

「俺は・・・何で死んだんだ？」

「ふむ、お前の記憶は扉を開けたところで終わっているはずじゃ。扉を開けた瞬間、酔ったアホが運転するトラックが突っ込んできてお前と衝突したわけじゃな。」

まさか自分が飲酒運転の餌食となるとは・・・。彼は落胆するが言葉は続く。

「そもそもお前は奇跡的に助かるはずだったんじゃが・・・、ワシが居眠りをしている間に弟子が確率にイタズラをしてな、君と衝突してしまっただんじゃ。」

「オイオイ、そりゃ悪魔じゃないか・・・」

そんな弟子がいてたまるか。彼は怒りをあらわにする。

「ま、まあそれは由々しき事態じゃ。もちろん弟子は処罰した。そして君が不憫すぎるのでお詫びといっでは何だが・・・転生する気はないか？」

「転生？」

彼は聞きなれない言葉にキョトンとする。

「そつだ転生じゃ。君の知っている世界に君の要求する状態で転生させてあげよう。」

「ほ、本当か・・・」

「ただし要求は5つまでじゃ。さすがに10も20も叶えてあげる事はできない。」

彼は喜んだ。死んでしまったがそのおかげで平凡な人生から脱出できるのだ。

「じゃあ俺をブロリーにしてくれ！身長は・・・でかすぎると嫌だし190ぐらいまでにしてくれ。」

「ぶ、ブロリーじゃと！？悟空や悟飯ではなく？」

「ああ、俺はブロリーのほうが好きなんだ。カッコいいしな。あの力にはあこがれるだろう。」

「むう・・・、分かった。容姿はブロリーにしてあげよう。」

彼は嬉々と話す。が、

「能力はオポジションじゃぞ。」

「なんだと・・・じゃあしょうがないな。劇中以上の能力、戦闘力をつけてくれ。」

「いいじやろう。これで2つじゃ・・・言い忘れたがこのままではスーパーサイヤ人にはなれんぞ。」

「まじかよ・・・」

制限の多い神様だと思うがブロリーの能力は規格外。それも仕方がないと納得？する。

「じゃあ今発表されてる。ブロリーのスーパーサイヤ人、通常のスーパーサイヤ人、伝説化、そして3になれるようにしてくれ。あと・・・できるなら4にもなれるようにしてくれ。」

一度はブロリーのスーパーサイヤ人4を見てみたい（なるのは自分だが）。そう頼んだところ、

「まあ、いいだろう。ただしいきなりなられては向こうの世界が崩壊するかもしれん・・・。だから少し制限をかけよう。」

「崩壊って・・・、さつきから制限の多い神様だな。」

「そう言うな。そうじゃな、今言った前3つはきっかけを見つけたらなれるようにしよう。」

「きっかけ？」

「そうじゃ。ブロリーにしても悟空にしてもきっかけがあってなれるようになった。さすがに君もいきなりなれるようにすることはできない。だがそのきっかけを見つけたら通常に伝説にも3にもなれるようにしよう。4には・・・自分で努力してくれ。」

なれることは保障されたようだ。

「これで要求は何個叶えられることになるんだ？」

「そうじゃな、スーパーサイヤ人の部分はなんとかしよう。これで3つじゃ。つまりあと2つというわけじゃな。」

「あと2つか……。そういえば俺がなるブロリーは手加減ができるの？」

劇中のブロリーは「手加減って何だ？」と言っていた。まさかとは思うが……

「出来ないな。それもオプシオンじゃ。」

「やっぱりなあ……。しょうがない日常生活や普通のコミュニケーションが出来るぐらい手加減できるようにしてくれ。あと頭脳、頭を良くしてくれ。」

「ふむ、了解した。これで5つじゃ。変更は無いな？」

「ああ。」

返事をするに神様？は後ろに振り返り、何かコソコソとし始めた。転生の準備でもしているのか？

「そういえば俺は何処の世界に転生するんだ？」

「そうじゃな……。空の軌跡の世界にでもどうじゃ？」

空の軌跡、彼がよく好んでプレイしたゲームである。

「は、早く転生してくれ！待ちきない！」

「そう急かすな……。そうじゃ原作知識とお前の個人情報の記憶は消去しておくぞ。」

「ちょ、そりゃまんまブロー」



「よし、転生じゃー」

こうして彼ことブローリーは空の軌跡の世界で転生するのであった。

## ブログ（後書き）

さすがに難しいですね・・・

転生話だけでこんなに長くなってしまいました。

さてブローリーとなった彼はどんな行動をとるのでしょうか。

ほぼチートですが原作崩壊はあんまりしません。

あと更新はゆっくりとなると思います。

ご承知ください・・・

ブローグ？

「・・・何処だここは。」

気がついてみると彼は森の中、しかし舗装された道の上で佇んでいた。

「俺は本当に転生したのか・・・」

辺りを見回してみるが誰もいない。

「・・・試してみるか。」

そう言うと彼は腕を前に突き出し、

「フンッ。」

気弾を放出した。軽く気を入れただけであるが、目の前で爆発が起こり小さなクレーターが出来上がった。

「確かに能力をもらえたようだ。では・・・」

腕を交差し、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

力を入れ気を高めるが、

「さすがにまだスーパーサイヤ人にはなれないか・・・」

転生する前に神に言われたとおり転生直後にはスーパーサイヤ人にはなれない。何かキツカケがなければなれないのだ。

「それよりもこの体・・・小さくないか。」

それもそのはず。彼の身長は今130cmにも満たないのだ。彼の要求した身長とは程遠い。

「元々のブロリーの身長は2mを越えていたしな・・・下手に要求したから微調整がきかなかったのか？まあいずれ成長するだろう。それにしてもここは本当に何処だ？空でも飛んでみるか。」

彼は現状を把握しようとするが、

グウウウウウ

「・・・腹が減ったな・・・ここに人はいるのか？」

まず人を探そう、そう考え彼は歩き出した。

「この度この戦争の講和条約が結ばれるエルベ離宮の警備、及び立

会いの命を女王陛下から直々に仰せつかった!!」

白髪が目立つ初老の男性が目の中の兵に檄を飛ばす。

「今現在我々がリベール王国軍とエレボニア帝国軍は休戦状態である!そのような状態の中、何か不測の事態が起こったならばまた戦争の火種となるかもしれん!」

男性は続ける。

「なので我々が直々にエルベ離宮の周辺、エルベ周歩道における魔獣の討伐を行うこととなった!」

男性の名はモルガン。王国軍のトップ、將軍の地位に就いている。

「内容は以上だ。さあ出発だ!」

そう言い放つとモルガンは兵を従えエルベ離宮へと向かっていく。

「・・・誰もいないのか。」

彼は道に迷っていた。途中空を飛ぼうと考えたが、途中あまりの空



「・・・さすがに俺でもゲテモノは食べ・・・ああ・・・」

彼はそのまま地に倒れた。

ブローグ？

「今現時刻をもって討伐作戦を開始する！」

周歩道に到着したモルガン一行はモルガンとその側近を残し散っていく。

「・・・この講和は絶対に成功させなくてはならない。」

愛するリベールの地にこれ以上血の雨を降らしたくない。そう決心しモルガンは作戦の終了の報せを待つ。

「將軍！」

散っていた兵の1人が何かあわてた様子でモルガンにかけよる。

「どうした！」

「それが元々木々があつた場所が消滅しクレーターが出来ています。」

「クレーターだと！？まさか爆弾でも仕掛けられているのか!？」

「今は分かりません！さらにクロノサイダーの群れが惨殺されています！」

クロノサイダー、彼が難なく倒した魔獣であるが危険度が高い何人も被害にあっている魔獣である。

「何が起こっているんだ・・・。分かったワシもすぐに向かう。案内しろ！」

「はい！」



モルガンは現場へと向かっていく。

「まさかここまでとは・・・」

現場に到着したモルガンは驚愕していた。あの美しい周歩道の木々が無くなり代わりにクレーターが出来上がっていたのだから。

「・・・眺めていてもしょうがない。調査を頼む。クロノサイダーの群れは？」

「こちらです・・・」

「これは・・・。」

モルガンは再び驚愕することとなった。皮膚が厚く耐久力が高いクロノサイダーの体が無残にもバラバラになっていた。

「一体誰がやったんでしよう……。。」

「バカモン！それを調査しなければならぬのだから！」

「申し訳ありません。」

モルガンは兵を怒鳴りつけるが内心自分も不安であった。

「ワシは一時離宮の方へ向か……。あそこに誰か倒れているぞ！」

少し森に入ったところに少年が倒れているを見つけると、すぐに駆け寄り抱き上げ、

「なぜ見落とす！貴様らには危機感というものがないのか！」

「申し訳ありません！」

「言い訳は後で聞く！いまはこの少年の治療が先決だ！」

死刑宣告を受け涙目になる兵を残し、モルガンは少年を抱えたまま離宮へと向かった。

「……ここは……」

彼はベッドの上で目を覚ました。これで気を失ったのは何回目だろう。ここは何処だ？と考えふと目を横にやると、

「果物……」

ようやく食べ物を見つけるやいなや、彼は果物に貪りついた。一応彼も子供の姿とはいえサイヤ人、果物はものの数分で消滅した。

「気がついたようだな。」

「??？」

扉を開け、男性が部屋に入ってきた。

「そう身構えるでない。ワシはモルガンという者だ。」

「モルガン？」

「そうモルガンだ。君の名前はなにかな？」

慣れない優しい顔で質問をするモルガンとは裏腹に、彼の心の中は焦りと不安が埋め尽くしていた。

（あれ？俺って誰だっけ？俺はたしか死んで転生して……。その前は何だったんだ？俺はいつたい……）

転生する際この世界の記憶と前世の記憶を消去された彼は答えることが出来ない。

「どうした？言えないのかね？」

「俺は……俺は……」

彼は頭を抱えだすが、ふとある名前が彼の頭の中に浮かび上がった。

「ブロリー……」

「??？」

「そう俺の名前は……ブロリーだ。」

ブロリーとしての新たな人生が始まる。

## プロローグ？（後書き）

前世の記憶が無くなり正真正銘プロリーとなりました。  
そもそもエルベ離宮にベッドってありましたっけ？  
もし矛盾や設定のミスがあればご指摘してください。

ちなみもう少しプロローグは続きます。  
あと感想ももらえたら嬉しいです・・・

## プロローグ？（前書き）

すみません、超急展開です・・・

ブローグ？

「ではブロー君。君は何故あの場所で倒れていたんだ？」

「・・・腹が減って気絶したんだ。」

今この部屋ではモルガンによる軽い質問が続けられていた。

「腹が減ってか・・・。戦争中だからな。食べ物が無いのも分かる。だがあんな場所に行くことはないんじゃないか？」

「いや気づいたらあの森にいた。歩いていたらあそこに辿り着いただけだ。」

「・・・詳しいことは聞かないでおこう。そうだ、君はあの魔獣について何か知っているか？」

「あの魔獣？」

「君の近くにいた、あー・・・バラバラになっていた魔獣のことだ。」

「ああ、あれなら襲ってきたから俺がやった。」

そう答えた瞬間、モルガンは眉をひそめた。

(口がすべっちまった・・・)

ブローは後悔するが、

「ブロー君、あの魔獣は大の大人でも武装しても1人では到底勝てんものだ。君のような子供がどうして勝てたんだ？」

(まずったな・・・しょうがない。)

ブローは腹をくくり白状することにした。

「たしかにあの魔獣を倒した記憶はあるのだが、無我夢中だったの  
でどうやって倒したのか分からない。」

さらにモルガンは怪訝そうな、警戒するような顔になるがそれをす  
ぐ解き、

「そうか……。君がやったのか。そうとう君は強いのだな。」  
「??？」

急にモルガンはブロリーを褒めるような発言をした。しかしそれと  
同時に

(急に褒めてきたな……。何を考えているんだ……)

ブロリーも警戒することとなった。その警戒は正しく、

「そうだ君は周歩道で起きた爆発のことを知っているか？」

案の定自分がやった気弾による爆発のことを聞いてきた。無論ブロ  
リーは

「爆発？」

何も知らない、無関係だという雰囲気でも聞き返した。

「(何も知らんようだな……。) いやなに周歩道で少し爆発が起こ  
つたらしくてな。目撃者を探してるんだが誰もいなくてな、君も何  
かしつとるんじゃないかと思ったんだ。」

「俺は……。そんなもの知らない。」



なんとかごまかせたようだ。

「そうか。それじゃしょうがないな・・・そうだ君、家族はいるのか？」

「家族？」

ブロリーは転生者、そんなブロリーに家族は・・・

「いない。」

「いない？」

「そう、みんな死んでしまった。」

半分嘘を織り交ぜながら答えた。するとモルガンの顔は曇り、

(いない・・・そうか孤児か・・・。マーシア孤児院に送るか、いやしかしもし本当に魔獣を倒したのなら・・・)

「??？」

一人物思いに入ってしまった。

「ああ、すまない。(ならば・・・)では君は行くところが無い、ということかね？」

「・・・ああ。」

「そうか・・・なら一つ提案がある・・・ワシと一緒に住まんか？」

「アンタと一緒に？」

予想外の言葉につい聞き返してしまう。

「そうだ。休戦中、といつても戦争中なのは変わらん。君が一人で暮らせないことに変わりない。」

「……」

「そこでだ。ここで会ったのも何かの縁だ。ワシの息子にならんか？」

「ブロリーは少し考える。しかし彼はこの世界について何も知らない。故に辿り着く結論は……」

「すぐに答えは出さんでもいいが……」

「いや、どうかお願いしたい。」

そう答えるとモルガンは驚いたような顔になり、

「いいのか？」

「ああ、あなたの子になれるならこれ以上の幸せは無い……」

モルガンは少し微笑み、

「ならばこれからはワシとブロリーは親子だ。よろしくな。」

「こちらこそよろしく頼む。」

二人は固く握手をした。

くおまけく

「そういえばブローリーはいくつなのだ」

「( )いくつなんだこの体は？( )・・・6歳だ。」

「・・・その年では大きいほうだな。」

## プロローグ？（後書き）

本当にすいません！プロリーの親父に似合うのがモルガン將軍しか  
思いつかなかったものでついやってしまいました！

しかもプロローグはまだ続きます。どうかご容赦ください・・・

プロローグ？

「ワシは少し用事がある。この部屋で待っていてくれんか。」

「用事？」

「そうだ。ここ離宮で今回の戦争の講和条約が結ばれることとなっている。」

モルガンは扉へと近づきながら、

「さすがにお前を連れて行くわけにはイカンからな。スマンがここに残ってくれんか。」

「ああ。」

「そうか。しばらく待っていてくれ。」

そう言い扉の外へと出て行く。

グウウウウウウ

「・・・また腹が減ったな。」

数時間後

「今帰ってきたぞ。」

「・・・」

「ン？・・・また気絶しておると・・・？」

「スマンな・・・」

「戦争中は食料が少ないというものを・・・」

ブロリーは再び果物をもらい何とか飢えをしのいだ。

「いや本当に助かった（まだ食い足りないが・・・）。」

「たく仕方が無い。行くぞ。」

「どこにだ？」

「王都に一時帰還することとなった。報告会をかねて王宮で会議を開くのでな。」

モルガンはブロリーを引きつれ外へと出て行く。

「グランセル

「ここが・・・」

「そうだここが王都、グランセルだ。」

王都グランセル、リベール王国の中心に位置し唯一帝国の侵略を防いだ町。

「美しいな。」

「だろう。そう言われるとこちらも嬉しくなるものだ。さあ、こちらに來い。」

二人は城へと進んでいく。

「これはまた・・・」

「グランセル城、我らがリベールの象徴だ。見たことが無いのか？」

「ああ、初めてだ・・・」

門の前にまで来ると

「あつ、モルガン將軍！」

「ふむ、門を開けてもらえぬか。」

「了解しました！開門！」

衛兵大声を出し指示を出すと門が開いていった。

「將軍。」

「何だ。」

「つかぬ事をお聞きしてもよいですか？」

「言ってみる。」

「その横にいる子供はどうされたのですか？」

横にいる子、ブロリーのことだ。

「ああ、少し事情があつてな。ワシが引き取ることになった。」

「將軍がですか・・・？」

「余計な詮索はするでない！」

「りよ、了解しました！」

「まったく・・・行くぞブロリー」

そう言い二人は城に入っていく。

「スマンがこの部屋で待つてくれぬか。」

「またか・・・食べ物は何？」

「少しは我慢せい！まったく・・・そこにあるものは自由に食べてはよいからな。」

モルガンは半ばあきらめているようだ。

「ワシは会議に出席する。しばらくの間だ。おとなしくしていてくれ。」

再びブロリーを残し、モルガンは出て行く。

「では・・・」

もちろん食べ物全てを食い尽くすブロリーであった。



「・・・戦争の被害はあまりにも大きく、犠牲も数多いものとなりました・・・」

少年はとっけているが、美しく、それでいて優しい目を持った女性が話す。

「それらは決して返ってくるものではありません。」

「・・・」

「・・・」

周りの人物は静かに女性の言葉に聞き入る。

「だからといって憎しみばかりを持ってはいけません。そうすれば亡くなった者達が浮かばれません。」

女性は続ける。

「今我々がするべきことはリベールの再建です。必ず戦争前よりもリベールを良いものとしようではありませんか！それが亡くなった者への手向けとなります。以上で私の話は終わります。各々、自分の持ち場へとついてください。」

「ハッ」「ハッ」「ハッ」

女性が言い終わると周りの人々は敬礼をし解散した。話していた女性の名はアリシア・フォン・アウスレーゼ、リベール王国の女王である。

「あとモルガン將軍、あなたは少し残ってください。」

「???了解しました。」

女王からの指名を受け、女王とモルガンは人がいなくなるまで待機することとなる。

「して何用ですか？」

「將軍、ここには二人だけ、そう固くなさらずに・・・。」

「そういうわけにはいきません。立場はわきまえなさいといけませんぬ。」

モルガンがそう言つとアリシアはため息をつき、

「あなたは本當軍人の鑑ですね。よろしいことでしょう。」

「ハッ！光栄であります。」

「ところで用件ですが・・・あなたは子供を引き取ったようですね。」

「知っておられるのですか？」

モルガンは軽く驚くが、

「フフフ、うわさで聞きました。あの將軍が子供を引き連れているところを見ると何かほほえましく思えると・・・。」

「・・・」

モルガンは軍の中でも硬派で通しているので内心恥ずかしくなる。

「本当のようですね。そこで相談ですが・・・ここへ連れてきてもらえないでしょうか。」

「何故？」

モルガンはこちらの言葉のほうにより驚いた。

「それはですね・・・クローゼ、こちらへ来なさい。」

そついうと扉を開かれ女性に引きつられて少女が入ってくる。

「クローゼ・・・私の孫はこの城ですつと一人でした。戦争中だったので遊ぶことすら出来ませんし、そもそも城の中では友達なんて出来ません。」

「・・・」

モルガンはアリシアの言葉を静かに聞く。

「そこであなたが子供を引き取ったという話を聞きました。どうかその子をクローゼの友達としてあげたいのです。」

「・・・了解しました。では少々お待ちください。」

そつ言いモルガンは部屋を出て行く。

数分後

「今度は何処に行くんだ？」

「女王陛下のところだ。くれぐれも無礼な発言はするなよ！」

モルガンはブロリーを引きつれ部屋へと入っていく。

「お待たせしました。」

「まあ、その子がですか？」

アリシアはブロリーを見つめる。なるほど、気のよさそうな子だが、  
とアリシアは思った。  
が、

「・・・」

「あらどうしたのですか。」

少女はアリシアの後ろに隠れてしまった。人見知りなのであろうか。

「このオバさんは誰だ？」

「コラッ！恐れ多くも女王陛下になんたることを言うか！」

そう言うとモルガンはブロリーの頭に拳を落とした。

「一体何するんだ!？」

「貴様が無礼なことを言うからであらうが!」

モルガンとブロリーは言い争いを始めた。だが、その様子を見て、

「クスッ・・・」

「「?」」

アリシアの後ろに隠れていた少女が少し微笑んだ。

「あの子は誰なんだ？」

「だから貴様は・・・あの方はこの女王陛下の孫娘、クローディア  
王女だ。」

「フフ・・・さあクローゼ、自己紹介をしなさい。」

そう少女は言われるとブロリーの前に行き、

「・・・私、クローディア・フォン・アウスレーゼ。クローゼって  
呼んで。」

「俺はブロリー、そのまま呼んでくれ。」

これがブロリーとクローゼの出会いとなるのであった。

## プロローグ？（後書き）

これでプロローグ、過去編は終わりです。長かった・・・自分にはまとめる力が足りないのかな・・・

そしてヒロインはクローゼに決定です。これは変更しません。誰が何と言おうと変更しません。

さてこれからプロローグはどんな活躍をするのでしょうか。・・・いや中身はぜんぜん違うからプロローグって呼んでもいいのかな・・・？

あとモルガンの姓は何でしたっけ？このまま続けられはしますが気になっています・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9025y/>

---

英雄伝説 悪魔の軌跡

2011年11月28日00時00分発行